

主イエスは、ペトロ、ヤコブ、ヨハネ、三人の弟子たちを伴って山に登りました。山頂に着くとイエスの姿が変わります。「服は真っ白に輝き、この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど白くなった」。するとモーセとエリヤが現れます。イエスと何事か話をはじめます。モーセとエリヤはこの世のものではありません。天の住人です。三人の弟子たちの目の前で天の風景が動き始めたのです。聖書の世界ではこの出来事を「山上の変容」と呼びます。その身は純白に光り輝く。モーセ、エリヤと話を始める。イエスは山の上で、神の子としての聖なる輝きを現したのです。

雲が一同を覆います。雲が晴れるとイエスは元の姿に戻っていました。一同は下山します。道々三人の弟子たちに命じました。「人の子が死者の中から復活するまでは、今見たことをだれにも話してはいけない」超常現象です。三人の弟子たちに口止めをしました。そうこうするうちに麓につきます。麓では、九人の弟子たちが一行の帰りを待っていました。ところが、尋常ではありません。大騒ぎが起きているのです。

一同がほかの弟子たちのところに来てみると、彼らは大勢の群衆に取り囲まれて、律法学者たちと議論していた。(9:14)

イエスが山へ登っているあいだに騒ぎが起きている。群衆を巻き込んで議論が起きている。人々の中から一人の男が現れました。騒ぎの主です。彼はイエスに訴えました。

「先生、息子をおそばに連れて参りました。この子は霊に取りつかれて、ものが言えません。霊がこの子に取りつくると、所かまわず地面に引き倒すのです。すると、この子は口から泡を出し、歯ぎしりして体をこわばらせてしまいます。この霊を追い出してくださいるようにお弟子たちに申しましたが、できませんでした。」
(9:17~18)

一人の父親です。子どもは悪霊に取りつかれている。癒してほしかった。そこでイエスを訪ねたのですが、あいにく留守であった。弟子たちに癒しを頼みました。しかし、弟子たちに悪霊を追い出すことは出来なかったのです。

人々は息子をイエスのところに連れて来た。霊は、イエスを見ると、すぐにその子を引きつけさせた。その子は地面に倒れ、転び回って泡を吹いた。イエスは父親に、「このようになったのは、いつごろからか」とお尋ねになった。「幼い時からです。霊は息子を殺そうとして、もう何度も火の中や水の中に投げ込みました。おできになるなら、わたしどもを憐れんでお助けください。」
(9:20~22)

悪霊は、まるでイエスを挑発するようです。目の前で子どもを苦しめます。転げ回っているのです。父親は思わず言いました。「おできになるなら、わたしどもを憐れんでお助けください。」今まで治らなかったのです。どこへ行っても、何をしても。だから思わず口から出たのです。「おできになるなら」。主イエスが一喝を加えます。

「『できれば』と言うのか。信じる者には何でもできる。」
(9:23)

子どもが苦しんでいます。皆は手をこまねいて見ているだけ。父親の願いさえ曖昧なものになっています。主イエス心は、カーッと燃えるのです。そして主は、激しく語った父親への言葉を形にしていきます。

イエスは、群衆が走り寄って来るのを見ると、汚れた霊をお叱りになった。「ものも言わせず、耳も聞こえさせない霊、わたしの命令だ。この子から出て行け。二度とこの子の中に入るな。」すると、霊は叫び声をあげ、ひどく引きつけさせて出て行った。その

子は死んだようになっていたので、多くの人が、「死んでしまった」と言った。しかし、イエスが手を取って起こされると、立ち上がった。(9:25~27)

イエスが命じました。子なる神が命じたのです。悪霊はあっけなく退散します。子どもは意識を失っていました。そしてイエスが手を取って引き起こすと、意識は戻って気力が回復して行きます。父親の願いは、イエスの言葉どおりに実現したのです。

イエスと弟子たちの一行は家に帰ります。そして家の中で弟子たちは、内々に尋ねるのです。

イエスが家の中に入られると、弟子たちはひそかに、「なぜ、わたしたちはあの霊を追い出せなかったのでしょうか」と尋ねた。(9:28)

留守を預かっていたのは九人の弟子たちでした。彼らが力を合わせても悪霊を退散させることは出来なかったのです。主イエスが答えます。

イエスは、「この種のもは、祈りによらなければ決して追い出すことはできないのだ」と言われた。(9:29)

さて、話は分かります。何が起きたのかはよく分かるのです。けれどもイエスの言葉はとても変です。「この種のもは、祈りによらなければ決して追い出すことはできない」弟子たちは、祈らなかったのでしょうか。祈ることをしないで、悪霊を追い出そうとしたのでしょうか。そのようなことはないと思います。むしろ彼らは、祈りから始めたでしょう。弟子たちに特別な能力はありません。祈らずに悪霊と対決するなどするはずがないのです。弟子たちは祈った。けれども、悪霊を追い出すことは出来なかったのです。そして

イエスは、「この種のものは、祈りによらなければ決して追い出すことはできない」と言う。

ここで問われます。福音書は何を告げようとしているのか。これが問われる。イエスは、弟子たちの祈りを否定しているのではないと思います。「お前たちの祈りは、祈りのうちに入らない」こういうことではない。福音書は、「イエスがいないとダメだ」と言いたいのです。今イエスを囲んでいるのは十二人の使徒たちです。彼らは伝道献身者。日本的に言えば出家の弟子たちです。この時点で既に信仰と伝道の訓練を受けています。この弟子たちが力を合わせて祈ってもそこにイエスがなければダメ。力を持つことはないと言うのです。

注目したい点があります。「この種のものは、祈りによらなければ決して追い出すことはできない」述べたイエス自身は、祈っていません。イエスは悪霊に命じました。「この子から出て行け。二度とこの子の中に入るな」そうしたら悪霊は出て行ったのです。イエスは祈らない人だと言うものではありません。このお方は子なる神です。山の上で輝く栄光を現したとおりです。だから、命じれば悪霊は退散します。そして弟子たちの祈りは、このお方が共にいるとき、はじめて力を現すのです。

問題は主イエスとの距離感です。「主が共にいてくださるとき、祈りは力を現す」では、「主が共にいてくださる」とはどういうことなのか、これが問われます。思い出したいのは、悪霊に取りつかれていた息子を持つ父親です。彼はイエスを訪ねました。救われなくて、息子を連れてやって来たのです。ここに父親の信仰を認めることが出来ます。そして彼は言いました。「おできになるなら、わたしどもを憐れんでお助けください。」カッコつきの願いです。「癒

されたら幸い。けれども、癒されないこともあるでしょう。」猶予がついています。これが距離です。父親はイエスを信じています。同時に、このお方の懐深くに飛び込んで行くことが出来ないのです。そしてイエス御自身が、父親の作った距離を壊すのです。「『できれば』と言うのか。信じる者には何でもできる。」心配しなくていい。わたしを信じて大丈夫だと言うのです。彼は言いました。

「信じます。信仰のないわたしをお助けください。」(9:24)

ここに距離はありません。信じられる心、信じられない心をそのままに見せ、イエスに祈っています。この後悪霊は退散します。イエスの力で退散させるのですが、イエスと共にいる父親の祈りが聴かれたと言っていいと思います。

祈りは、あなたの本当の心をキリストに見せることです。主に對する信頼があります。不信仰があり、邪な気持ちを抱くこともあります。信じる中で、自分が何を信じているのか分からなくなる時もあります。そして、ありのままの心をささげるのです。主イエスは、十字架についた子なる神です。不信仰であろうと、どれほど深い嘆きの中にいようと、主キリストは、あなたをそのまま引き受けることが出来る方です。

祈り

父なる神さま。主は共にいてくださいます。自らが作る心の距離や、垣根があります。これを取り払います。嘆きも、希望も併せ持つ私たちです。本当の心をあなたにささげます。私たち一人一人を引き受けてください。そして主と共に、今日から明日へと、立ち向かう者とさせてください。

主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。

No.766

マルコによる福音書 9章 25~29節

『秘密の話』

2023年7月23日

